

チェコ語のタイプ—F S P 類型論の観点より

本 城 二 郎

1. 序論

チェコ語は、(伝統的)類型論的には屈折タイプ・SVO 語順・形容詞前置・属格後置・前置詞言語に属するとされているが、実際は例えば Karel zabil Marii/M. zabil K./K. M. zabil/M. K. zabil/Zabil K. M./Zabil M. K. の6通りの語順が文法的に可とされる自由語順の言語である。本論は、FSP 類型論の枠組みでチェコ語の基本タイプを特徴付け、上記の変則の存在に対する妥当な説明を加える一つの試みである。

2. 対照言語分析より言語類型論 — F S P 類型論の可能性

類型論的に異なる典型例を出発点とし、まず4言語(中・日・チェコ・英語)の対照例をF S Pの観点より観察してみることにする。最初に総称文の例をあげるが、これは二重主語構文と呼ばれるもので、一般に TOPIC-SUBJECT の読みが可能である。

(1) CH. Xiàng bízǐ cháng.

elephant nose long

J. 象は 鼻が 長い。

elephant-T. nose-S long-P

CZ. Slony mají dlouhé choboty.

elephants-S. PL have-3PL. PR. long-ACC. PL. trunks-ACC. PL.

E. Elephants have long trunks.

(1)' CH. Xiàng de bízǐ cháng.

G.

J. 象の 鼻は 長い。

-G. -T.

CZ. Slonové choboty jsou dlouhé.

-G. PL. are

E. Elephants' trunks are long.

[注] CH.:CHINESE; J.:JAPANESE; CZ.:CZECH; E.:ENGLISH; T.:TOPIC; S.:SUBJECT;

P:PREDICATE; 3:3RD PERSON; PL.:PLURAL; ACC.:ACCUSATIVE; G.:GENITIVE

_____ : THEMATIC ELEMENTS

(2) CH. Tā tóu téng. /Ta de tóu téng.

he head ache

J. 彼は 頭が 痛い。

he-_T. head-_S. ache-_P.

CZ. (On) má bolest v hlavě / Bolest má v hlavě /

(he)has ache in head ache (he-)has

V hlavě má bolest / V hlavě bolest má.

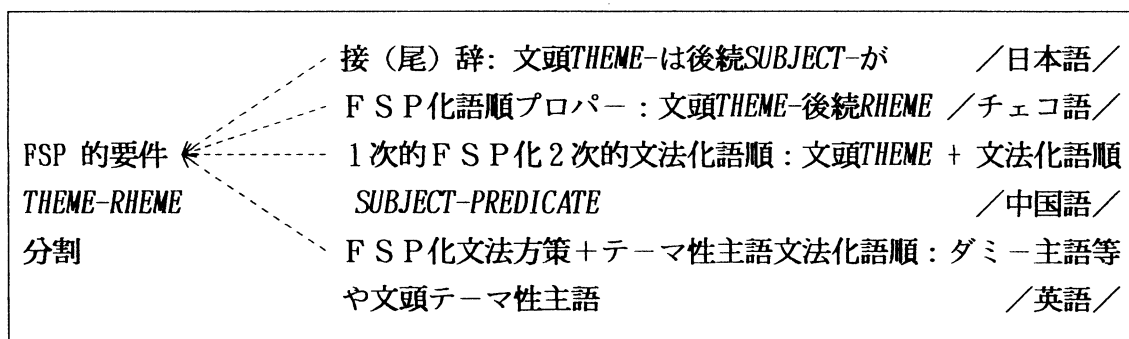
Bolí ho * hlava / Hlava ho bolí.

ache him head

〔注〕 * hoは jeho (<on ' he') の短形で、前の文頭要素に対する前倚辞として常に文の第 2 要素の位置をしめる。

E. He has a headache (a ache in his head). / His head aches.

上の(1)–(2)より、以下のような F S P 要件に基づく 4 言語の特徴付けが推論される。



3. 言語類型論の理論的基礎—プラハ学派の Skalička および Sgall 類型論

3. 1. 形態・統語類型論の基本概念— Skalička の形態類型論

言語の類型化に関与的な特徴—類型的特徴—は、伝統的な類型論の枠組みでは主として文法レベルの構成原理を表示するマーカー、すなわち文法的形態マーカーの類別に基礎を置いていたと考えられる。ここでは、その内最も記述的妥当性が高いと見なされる Skalička の類型論を検証し、チェコ語に基本的なタイプの抽出を試みる。

/ 5 つの類型論的特徴の抽出とそれらの組み合わせ /

〔特徴〕 (i) 文法的形態マーカーの有無 (ii) その機能性の質 (多機能か単一機能か)
(iii) その種類 (語か形態素か) の 3 つの基準

(i) → POLYSYNTHETIC 多総合性 (文法的形態マーカー無し) とその他 (文法関係を表示する文法的形態マーカー有り) 後者はさらに、(ii) より単一機能文法的形態マーカーと多機能文法的形態マーカーの 2 種

(iii) → 単一機能文法的形態マーカーは AGGLUTINATIVE 膠着的 (接辞による形態マ

ーカー)と ANALYTIC・ISOLATIVE 分析的・孤立的(単語による形態マーカ―)

(iv) → 多機能文法的形態マーカ―は INFLECTIONAL 屈折的(語尾としての形態マーカ―)と INTROFLEXIVE 内屈折的

<かなりマイナーで単独で一言語の主要タイプを特徴付けること不可>



／チェコ語の基本タイプ／

これはEXTREME 究極的な特徴を視野に入れているという点で演繹的類型論、または一般的にはCONSTRUCTIVE構成的類型論と呼ばれている。しかしながら、現実言語はより多くの要件が関与的と考えられ、それに近づく為には妥当な修正が必要になる。

3. 2. Sgall の拡大形態類型論

上記 Skalička の類型論は、文法的形態マーカ―と機能との可能な関係を類別化したもので、いわゆるポテンシャルなタイプ分け理論と見なすことができる。それに対して現実言語の構成要素である形態素・語・文と機能の関係を類別化したのが Sgall の拡大形態類型論で、それは以下のような5つの類型論的特徴で規程されるタイプと、それぞれの構成言語を列挙したものである。ここでもチェコ語に優勢的なタイプを検証してみることにする。

POLYSYNTHETIC タイプ：類型論的特徴：語と文法素(形態素)の厳格な区別

構成言語名：ベトナム語、中国語、タイ諸語、ヨルバ語等

AGGLUTINATIVE タイプ：類型論的特徴：一語中一つ以上の文法素の結合

構成言語名：トルコ語、フィン諸語、グルジア語、バスク語、アルメニア語、エスキモー語、東印欧諸語、日本語等

ISOLATIVE タイプ：類型論的特徴：語と文の厳格な区別および語と形態素と文法素の区別の弱体化

構成言語名：英語、フランス語、ハワイ語その他

INFLECTIONALタイプ：類型論的特徴：文法素と形態素の厳格な区別

構成言語名：ラテン語、大半のスラブ諸語、古代印欧語等



//チェコ語に優勢的な特徴//

INTROFLEXIVEタイプ：類型論的特徴：INFLECTIONALタイプのバリエントと見なされるが一言語の基本的特徴にはなりえず常に他のタイプと結び付けられる。

3. 3. F S P 類型論の可能性－ Sgall の F S P 類型論モデル

3. 3. 1. 単純（原型的）F S P 類型論

言語のより現実的なレベル即ち発話のレベルにおける差異を表示する形態マーカーの違いによる分類の必要性より提案されたもので、以下の 3 タイプに分類される。伝達機能実現のための方策としての発話構成の形態マーカーによる分類即ち *THEME-RHEME* 分割（F S P 要件）を実現する形態マーカーによるタイプ分け類型論と見なすことが出来る。ここでは、広義の形態マーカーつまり接辞・語順・*ad-hoc* な特殊構文・イントネーションの 4 つとそれらの組み合わせにより F S P が表示される。ここでも、最終的には、チェコ語に関与的なタイプと特徴の抽出が試みられる。

(i) 語順、イントネーションが F S P を表示するタイプ：

言語：スラブ語の大部分と古代印欧語

特徴：自由語順、文尾のイントネーション・センター



//チェコ語に関与的な特徴//

(ii) 語順、特殊文法構文、イントネーションが F S P を表示するタイプ：

言語：英語、フランス語および他の西欧諸言語

(iii) 接辞が F S P を表示するタイプ：

言語：日本語、他の東アジアおよびアフリカ諸言語

しかし、幾つかタイプ分け困難な言語や周辺のタイプの言語も現実には存在し、たとえば、専ら語順による F S P 表示を行う中国語は(i) か (iii)か、ダミー主語を持ちながら従属節では F S P 化語順を有するドイツ語は(i) か(ii)か等、単一構成原理（F S P 構成原理）の形態マーカーのみによるタイプ分けには常に変則が伴う。

3. 3. 2. 拡大 F S P 類型論

単純 F S P 類型論に内在する変則を解消するには、複数の構成原理を射程に入れる必要がある。ここでは、少なくとも以下の 3 つの言語構成原理が関与的と見なすことが合理的と考えられ、それぞれ順に下位の文法レベル－中位の発話レベル－上位の（文脈）テキスト・レベルに対応する構成原理に相当する。

構成原理	：結合価* ¹	F S P	(名詞句の) 定性* ²
	↓	↓	↓
言語レベル	：文法レベル	発話レベル	(文脈) テキスト・レベル

*¹ VALENCYの訳。 *²DELIMITATION の訳。

可能な3通りの組み合わせがあり、それぞれの典型言語および残りの背景化構成原理の表現手段を列挙し、特にチェコ語に特徴的なタイプの抽出を試みる。

(a) 結合価+ (名詞句の) 定性が優勢なタイプ:

典型言語: 英語

F S P 表現手段: *THEME* 性文頭 *the*, *RHEME* 性 *a(n)*

(b) 結合価+ F S Pが優勢なタイプ:

典型言語: スラブ諸語の大部分、ラテン語、サンスクリット語等

(名詞句の) 定性表現手段: 代名詞、*THEME* 名詞は定、*RHEME* 名詞は不定



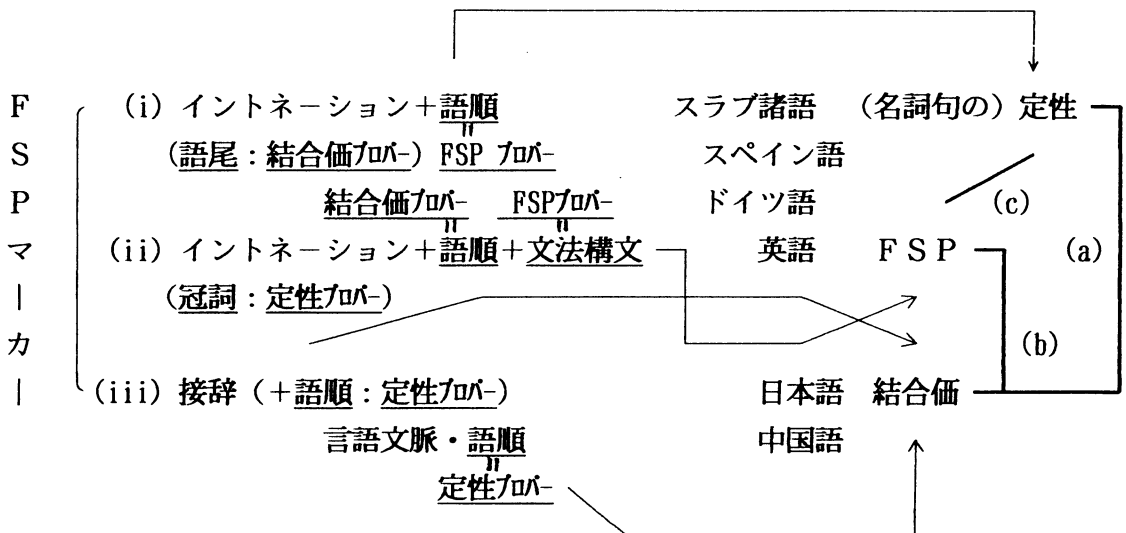
//チェコ語に特徴的なタイプ//

(c) F S P + (名詞句の) 定性が優勢なタイプ:

典型言語: 中国語 (典型的)、日本語と他のアジア諸語 (部分的)

結合価表現手段: 言語文脈・語順、動詞の種類・派生接辞

これより、タイプ分け類型論統合モデルの設定が可能となる (Honjo(1995) より)。受動構文がFSP 構成専用に使われた場合、それはFSP 化した訳でFSP 化構文といえる。同様に、文法化語順 (結合価 \rightarrow による)、限定化詞 (=冠詞) (定性 \rightarrow による) などがそれに相当し、対応する言語タイプの主要な特徴をなしているといえる。



4. 通時類型論の提案—拡大F S P類型論に基づく言語類型変化

4. 1. 類型変化のプロセスと典型言語の位置付け

前節のタイプ分けモデルは、類型変化およびそのプロセスの各段階に相当する現実言

語の存在により根拠づけられると推論される。それは以下の表に概観される。

推論的類型変化プロセス (Honjo(1995) より引用) :

〔変化の段階〕	〔現状と変化要因〕	〔解消結果〕
第1段階：接辞（日本語）または語順（中国語）の多機能性		⇒機能の分化
第2段階：結合価－接辞>結合価－屈折語尾・前置詞		⇒接辞の屈折語尾化
	／結合価が－屈折語尾の発生／	
第3段階：F S P・定性－接辞>F S P・定性－語順		⇒語順の2機能性
	／語順のF S P化／	
第4段階：定性－語順>定性－冠詞		⇒各構成原理の文法化
	／定性が－冠詞の発生／	
第5段階（前半）：結合価－屈折語尾>結合価－屈折語尾（＋語順）		
	／文法化語順の発生／	
第5段階（後半）：F S P－語順>F S P－文法構文（・イントネーション）		
	／F S P が－文法構文の発生／	⇒語順機能の弱化・衰退
第6段階：結合価－屈折語尾・前置詞>結合価－（屈折語尾・）前置詞・語順		
	／屈折語尾の衰退／	

4. 2. チェコ語の段階と類型

チェコ語の段階と類型については、以下のような推論的位置づけが考えられる。

チェコ語：第3段階（語順の2機能性を部分的に解消する前倚辞の発達により、定性－前倚辞を実現している。）
定性・F S P－語順、結合価－屈折語尾
（定性－前倚辞）

さらに変化のプロセス確認のため、近接段階の言語特徴を列举してみる。ここでは、近接段階から次第に変化して行くプロセスが個別言語特徴の中に跡付けられている。

ロシア語：チェコ語と同一タイプと考えられるが、定性－移動アクセント法という点で唯一異なる。

スペイン語：第4段階（結合価－前置詞およびF S P－語順の保持に伴う未発達な文法化語順、定性－冠詞の分化の結果この段階にとどまる。）

定性－冠詞、F S P－語順、結合価－前置詞

ドイツ語：第5段階（結合価－格語尾の保持とイノベーションとしての文法化語順発生の結果、この段階の前半と見なされる。）

定性－冠詞、F S P－語順、結合価－屈折語尾＋前置詞（＋語順）

英語：第5段階の後半（F S P－文法構文が新たにイノベーションとして導入され

た他は、文法化語尾と文法化語順が併用されるようになり、次の第6段階に向かいつつあると見なされる。)

定性－冠詞、F S P－文法構文、結合価－語順＋前置詞（＋屈折語尾）

フランス語：第6段階（英語よりもさらに進んで、文法化語順は前置詞とともに、旧来の文法化屈折語尾に完全に取って代わりつつあると見なされる。）

定性－冠詞、F S P－文法構文、結合価－語順＋前置詞

5. チェコ語の類型的諸特徴の具体的検証

5. 1. F S P類型論の特徴のチェコ語における具体例検証（3. 3. 1. より）

単純F S P類型論は、F S P実現のための多様な言語方策によるタイプ分けと規定された。そこで、現実のチェコ語文法体系の中での跡付けを検証してみることにする。

(i) 語順、イントネーションがF S Pを表示するタイプ：

特徴：自由語順、文尾のイントネーション・センター

自由語順については3×2通りのバリエーション（統語的シノニム）が可能である。

(3)a Karel miluje Marii. ⇔ Marii miluje Karel. ←Kdo miluje Marii?

5つのバリエーション Miluje Karel Marii. ←Miluje ji on←Miluješ Marii?
 ←Koho K. miluje? Miluje Marii Karel. ←Miluje ji K.←Miluje M. Jan?
 Co dělá K.? Karel Marii miluje. ←K. ji miluje. ←K.M. nenavadil?
 Co se (to) stane? Marii Karel miluje. ←M. miluje on. ←Kdo M. miluje?

文尾のイントネーション・センターと語順に関しては以下の通りである。

(3)b Pavel dostal nové KOLO. /客観的語順/ ← Co Pavel dostal?

T(HEME) R(HEME)

Nové KOLO (Pavel) dostal. /主観的語順/ ← Co Pavel dostal?

R T

Nové kolo dostal PAVEL. ← Kdo dostal nové kolo?

T R

Pavel (to) nové kolo DOSTAL. ← Pavel si (to) nové kolo KOUPIIL?

T R

* 大文字はイントネーション・センターの担い手

上記の観察より、単純F S P類型論の枠組みでは、チェコ語はF S P実現のための自由語順、イントネーションによるF S Pの修正という方策を可能にしている。

5. 2. 拡大F S P類型論の特徴のチェコ語における具体例検証（3. 3. 2より）

3つの言語構成原理の可能な組合せより、2つの優勢原理の連係と残りの背景化原理の文法方策の種類により規定されるのが拡大F S P類型論であった。同様に、チェコ語文法体系に関与的と見なされるタイプ特徴を検証してみると、以下ようになる。

(b) 結合価＋F S Pが優勢なタイプ：

(名詞句の) 定性表現手段：代名詞、THEME 名詞は定、RHEME 名詞は不定

- (4) CZ. Řeka teče rovinou. (The river flows through a PLAIN. *)

THEME定 RHEME不定

Rovinou teče ŘEKA. (Through the plain there flows a RIVER.)

THEME定 RHEME不定

Jedna řeka teče (tu) rovinou. (A river flows through the PLAIN.)

RHEME不定

THEME 定

* 大文字はイントネーション・センターの担い手

上記の観察より、拡大F S P類型論の枠組みでは、チェコ語は他のスラブ諸語と同様F S Pプロパー実現のための語順（F S P化語順）を実現しており、イントネーションはそれを強化していると思なされる。一方、背景化した定性もF S P（に従う）語順により表示され、ここに語順の2機能性という不安定現象が生まれることになる。

6. 通時的類型論よりのチェコ語タイプの具体例検証（4. 2より）

既述の推論的類型変化プロセスは、拡大F S P類型論の枠組みに基づく、現実言語の可能な言語接触により証拠付けられる、多機能性（機能負担）の排除という変化要因により説明可能なモデルと考えられる。そこでは、各段階における不安定要因、多機能性を、典型言語がどの程度内在し、それを如何に解消するのかを検証することは重要である。以下に、チェコ語についてそれを観察してみる。

第2段階：結合価－接辞 > 結合価－屈折語尾・前置詞 ⇒接辞の屈折語尾化

／結合価が屈折語尾の発生／

第3段階：F S P・定性－接辞 > F S P・定性－語順 ⇒語順の2機能性

／語順のF S P化／

チェコ語：第3段階（語順の2機能性を部分的に解消する前倚辞の発達により、定性－前倚辞を実現している。）

定性・F S P－語順、結合価－屈折語尾

（定性－前倚辞）

7. 結論－チェコ語の基本タイプと現状－

上記の通時的観察よりチェコ語の基本タイプの現在における位置付けが以下の様に設定可能である。

チェコ語の基本タイプ：

結合価－屈折語尾・前置詞による結合価プロパーの屈折語尾

F S P・定性－語順による語順のF S P化

語順の2機能性の部分的解消としての定性－前倚辞

ここから、特に語順の2機能性から推定される段階の移行（またはタイプ変化）という現象を、それを裏付けるポテンシャルな言語事実を提出することにより観察することとりわけ重要である。なぜなら、体系としての言語は常に変則を潜在的に含んでおり、それを解消すべく新たな再体系化が図られ、（現行の）終極（ではあるが更なる変化の要因を内在する）へと向かっていくというメカニズムの設定が極めて合理的かつ論理的にも妥当と考えられるからである。具体的には、チェコ語における近隣言語、特にドイツ語、との長年に渡る言語接触の結果、他のスラブ語には例を見ない言語現象が発生し、既に文法化したものも散見される。それらの全てが上記の基本タイプの体系的変則、つまり更なる変化を動機付けるものかどうかは、より詳細に考察すべき今後の課題と考えられるが、ここでは若干の説明可能な現象を観察することにとどめたいと思う。観察の対象は、上記第3段階から（第4段階をへて）第5段階（前半）（＝ドイツ語）へのプロセスに関与的と見なされる言語事実とし、それらの文法化の度合いが移行の段階を示すものとする。つまり、より文法化された変則が次の段階に近いものとする。勿論、各段階は飛び越しの移行が可能であろうことは、混質言語（クリオール言語）の存在より明らかで、その際、移行的段階（例えば上記の場合第4段階）が潜在化していたと見なすことが可能であろう。しかし重要なのは、それらの現象を言語事実として位置付けることが可能かどうかということで、たとえ非体系的変則（たとえば文体的変異等）であろうと、それを列挙する必要がある。以下に、現代チェコ語の変則としての *mít/dostat* + -(e)*no*（受益者受動／状態完了—かなり体系的—）および *dát/nechat* + 4格 + -*t*（使役—やや体系的—）、前置詞使用拡大に伴う格体系の単純化（比較的体系的）、*ten/to/ta*の頻用と冠詞的機能（非体系的）について若干の検証を加え、チェコ語におけるタイプの移行段階を通時的にとらえることを試みる。なお、文法化語順という第4・5段階に特徴的な現象については、筆者の知るところ、定性—前倚辞以外には観察されていないかまたは顕在化していないと考えられる。予見的には、下記のようなイノベーションとしての新たな分析的完了（さらに受動）形や、前置詞多用による格の単純化など、一連の分析性への傾向を通じて発達していくであろうことは、西欧諸言語、特に英仏両言語の歴史より推測される。

mít/dostat + -(e)*no* の例：/受益者受動//STAVOVÉ PERFEKTUM（状態完了）/

脱動作主化によるRECIPIENTの主語上昇

- | | | | |
|------|---|---|--|
| (5)a | Mám uvařeno. | ← | Uvaří mi (matka). |
| (5)b | Pavel má/dostal slíbeno od Petra nové kolo. | ← | Petr slíbil Pavlovi nové kolo. |
| (5)c | Už mám ten pokoj uklizený. | ← | Už jsem si pokoj uklidil.
Už mi někdo pokoj uklidil.
Už jsem pokoj někomu uklidil. |

第5段階
への接近
HABEN/
HAVE完了
||
分析性

dat/nechat + 4格 + -t の例: /KAUZATIVUM (使役) /

脱動作主化による INICIÁTOR の主語上昇

(5)d Otec dal/nechal Bořka ostríhat holičem/od holiče/u holiče.

← Holič ostríhal Bořka z podnětu jeho otce.

不定詞化

||

分析性

前置詞使用の拡大に伴う格体系の単純化の例:

(6)a 2 格・3 格の4 格化 uživat + 2格 (/4格 coll.Cz) užít lek.

není tam nikdo <není tam nikoho

učit + 4格 (/3格) učil syna ruštinu/ruštině.

第4段階

への接近

前置詞—

結合価

(6)b 7 格>前置詞 + 4格 starat se oč (<starat se čím)

(6)c 7 格>前置詞 + 7格 psát s perem (<psát perem)

(6)d 3 格>前置詞 + 2格 těšit se z + 2格 (<těšit se + 3 格 těši mě)

ten/to/ta の頻用と冠詞的機能の例:

(7)a Byl jednou jeden král a ten král měl tři dcery. /前方照応/

Cf. Viděl tam nějaký domek. /不定冠詞的/

第4段階

への接近

冠詞—

定性

(7)b Podej mi tu knihu. /直示/

(7)c Ta hlava mé dnes boli!/Mám ten dojem. /自己の情緒/

[参考文献]

Honjo, J. (1988): 「チェコスロバキアの言語事情」 (“The Linguistic Situation in Czechoslovakia”), 大阪言語研究会第94回例会提出ハンドアウト (a handout presented on the occasion of the 94th Regular Meeting of Osaka Gengo Kenkyukai)

Honjo, J. (1995): 「FSP 類型論と言語の類型的変化」 (“FSP Typology and the Typological Changes in Languages”), 『言語文化学会論集』第4号 (*Journal of the Society of Language and Culture* Vol.4), pp.65-79.

Li, N.C. and S.A. Thompson(1976): “Subject and Topic: A New Typology of Grammar”, in Li, C.N. (1976): *Subject and Topic*, pp.457-490.

Nakagawa, M. (1992): 「類型論から見た中国語と日本語と英語」 (“Chinese, Japanese and English Seen from the Typological Viewpoint”), in 大河内 (編) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 (*Collections of Papers on the Contrastive Study of Japanese and Chinese*, ed. by Y. Okochi), pp.3-22, くろしお出版.

Skalička, V. (1981): *Lingvistické čítanky III typologie*, SPN: Praha.

Sgall, P. (1992): “Zur Typologie der Thema-Rhema-Gliederung”, *Studien zum Tschechischen, Slowakischen und Deutschen: aus vergleichender Sicht*, pp.173-185, Karl-Marx-Universität: Leipzig.

Sgall, P. & E. Hajičová(1982): “Functional Sentence Perspective in the Slavonic Languages and in English”, in *Južnoslovenski filolog* 38, pp.19-34, Beograd.